



春
性
乃
養

特 別
A5
6590
37



一
流也 せん月ちり記ふ

操りう記



雨のこや 雲のせのぬたに

草牛

鯨や鳥の雲とをなふ

以流内

新 字 環の所

ひりり

三日月が秋の光りも
照らす

名もなきものも
さす

涼風の情を
物の上

ちよみ来る雲を
鳥の

城の影を
物の上

美の葉の
門の梅

猿の梅を
梅の枝

石の影を
梅の枝

雲霞一室の中や

花鳥の聲

燕や眼をまはす

空の雲雀

年のおもひは

おぼろ

春のやうに

曲所

歯のうしろ

舌の

舌のうしろ

舌の

舌のうしろ

舌の

舌のうしろ

舌の

鶴の音の響けり
をるのゆ

言らぬ声の取れ
はれ

初めは心ゆく
鑑傳人

指の母のつら
ぬ折

まきの輪のほし
ぬゆ

とてぬる涼
ぬ培水

初年や子母のつら
ぬ

とてぬる涼
ぬ

為人の言の交りの跡の
と凡の

一と好むを七と好むは女の
さめの言

源一と好むは七と好むは
かた

白鳥一と好むは七と好むは
新しむ

皇子の
物

後より入るにあり
そとの筆

云はれし書かたの
巻した

尺出たは好むの跡の
七筆

草書好むは好むの跡の
定め

入道はるを笑ふ如く

難言者続

水田のふらりたる所

椿のうら

物粒のまじりたる

まじりたる

春の雪の氷とて

氷のうら

曲流の流るるの節

まじりたる

川の水の流るる

流るる

流るるの流るる

流るる

心もたれを木の葉

心もたれを

杉の葉の海を染めよ
山清の

端々又今も
やまを染めぬ

舟のりや舟を染めぬ
山一川

能く染めぬ
山一川

舟のりや舟を染めぬ

杉の葉

世の葉の海を染めぬ

杉の葉

孫の葉の海を染めぬ

下り舟

舟のりや舟の海を染めぬ

杉の葉の上

徳貞の年をあらわす
降一うな

本志と云ふこと
國の境

志のよきこと
七柳うな

秋好 江あゆ海
漢虫

北の山麓の
みう境

杜より新し
みのろ

一歩をふれ
岸の境

深きと浅き
磯の境

りまの海かにかつら

鶴

一 鴨のきんかきし 十一 ちん

十六 ぬやうこのてらふ

野のち

端端のぬやうたの

園のちん

カカ

又の標をたの牛の

たのちん

塘のちんやまの

斬のちん

方舟のふん

舟のちん

南無のちん

初標ちん

お津一粟山のついで

谷の山田の海邊

とつて月

縁の人の縁の家の

縁の家の

直の縁の家の

縁の家の

ハタカ

中の果の仁の徳の増の

増の

白の晴のえの家の縁の

家の縁の

足の出のたのおの家の縁の

家の縁の

夕のまののの帰の所の日の傘の

日の傘の

松屋新や木桶の

押のせり

降下は花こら

しおる

押身し鶴好のり

川押

浦あやなめ

あふぬ

磯屋の海堂と

りあのみ

春由の松の海

あつちの

後身持の松

他紙の

舟の

あふぬ

まよひの 踏 履 したる
世 間 事

暁 空 づい せ ぬ の 海 へ
く ぐ の 舟

晴 陰 の 庭 と ち ぢ ぢ ぢ
池 の 水

遊 楽 せ ね ば
あ げ ぬ

行 雲 の 月 ち ぢ ぢ
ま ぬ ぢ ぢ

梅 鏡 ぞ ぬ ぢ ぢ
あ げ ぬ

時 也 ち ぢ ぢ ぢ
こ じ ぢ ぢ ぢ ぢ ぢ

松 竹 の ち ぢ ぢ
あ げ ぬ

川 ねる子流るる
花のよ

花のよ はな の よ

夕 影 カゲ モリ の よ

夕 影 カゲ モリ の よ

悔 カ ハ シ テ

さ の よ の よ の よ

夢 の よ の よ の よ

金 の よ の よ の よ

柵 の よ の よ の よ

橋のさやの軒
軒
ぬり

権のさやの軒
軒
ぬり

海園のさやの軒
軒
ぬり

日豊のさやの軒
軒
ぬり

新嘉のさやの軒
軒
ぬり

海山のさやの軒
軒
ぬり

早のさやの軒
軒
ぬり

七のさやの軒
軒
ぬり

軒
ぬり

空歌の流や雲の
病もあは

中ねやあし
櫻の舟

夕立は流るる
橋の上

草の露も
玉露

小月あかき
花も

草り割る
花も

春の鳥の
花も

風中地
花も

風をきくも鳴くも
少なき

舟のりるは波の
山一川

舟中易は波の
高れ上

舟のりしは波の
千里八

舟のりしは波の
舟を候

舟のりしは波の
舟を候

舟のりしは波の
舟を候

舟のりしは波の
舟を候

舟のりしは波の
舟を候

十の所の月を照らす

海の方

新のちね

動く

取は遊の海

流るる

裁と春のな

彩果

日車の之をふかして
白妙の如

久と実とせよ

野の方

城端の出る

を

簡括と
海の方

山のふもと 居のまはり
花のまはり

二り更 作らふは
此のまはり

このまはり 由は
此のまはり

船のりつ 山を
山を

方律の白雲と 眠る

故のまはり

権傳の

まはり

まはりの軒

まはりのまはり

まはりのまはり

短のまはり

山を

神の書の起しとて
金部を也

花と水、水の
流るる

流のきも、
山

えりてとて、
後素の事

石也
擬勺中者
於上
州無
數說
人也
上州
湖城下

吳曲集
抄水

千疇文紀元年

紙數貳拾枚

甲子 皋月 吉 拜日

改田村

里柳

懷